

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Interaction between respondents in three-party survey interviews : Interviews with pairs of same-sex friends

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 智子, 木谷, 直之, KUMAGAI, Tomoko, KITANI, Naoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002163

三者面接調査における回答者間の相互作用

—— 同性の友人同士の場合 ——

熊谷 智子
(国立国語研究所)

木谷 直之
(国際交流基金日本語国際センター)

キーワード

三者間談話, 面接調査, 回答者間の相互作用, 参加者役割

要 旨

本稿では、三者間談話の一つとして2名の回答者に対する面接調査を取り上げ、そこに見られる回答者間の相互作用を分析した。調査者と回答者との間の質問—回答という基本的枠組みを持つ面接調査において、回答者間の相互作用は逸脱的行動にもなり得るが、実際には回答行動として機能していた。相互作用の種類としては、同意要求・情報確認とそれへの応答、もう一人の回答へのコメントとそれに対する応答・反応、互いの発話をふまえた回答、もう一人の回答への相づち・反応が観察された。本稿では、これらの相互作用が、回答行動のパターンに「調査者の質問に各々の回答者が個別に答える」以外の各種のサブタイプを出現させると同時に、回答者による談話行動においても回答以外のサブタイプを可能にしていたことを指摘する。

1. はじめに

談話研究の分野では、様々な種類の談話を対象に、各種の話者行動や相互作用が分析されてきたが、従来の研究では二者間のやりとりがデータとして用いられることが多かった。しかし近年では、3人以上の参加者による談話の研究も増えている。多人数でのやりとりにおいては、発話の受け渡しや相互作用のなされ方が多様になる分、一対一のやりとりにはない興味深い現象も観察されている。

本稿では、三者間談話の一つの種類として、2名の回答者に対する面接調査¹を分析する。面接調査では、調査者が調査質問を発して回答者がそれに答えるというパターンが中心となり、その意味で、調査者と回答者との間の相互作用が基本と考えられる。ただし、調査の場の雰囲気や回答者間の関係などによっては、回答者同士の相互作用が現れ得る。そうした回答者間の相互作用が、面接調査という談話において、回答者のどのような回答行動や談話行動を実現しているかを明らかにすることが、本研究の目的である。

以下では、2節で多人数会話の分析と面接談話の枠組みに関する先行研究を概観し、3節で本稿の分析に用いたデータの概要を述べる。4節では、回答者間の相互作用について、データに見られた種類をあげるとともに、それらが面接調査における回答行動として位置づけられ、一定の働きを果たしていること、また回答者の(回答以外の)談話行動のサブタイプとしても現れてい

ることを論じる。5 節では、それらの所見に基づいて考察を行い、6 節で今後の課題を述べる。

2. 先行研究

本研究で扱う事象に深く関わる問題として、3 人以上の多人数による談話、および面接調査談話の枠組みや特徴に関する先行研究を概観する。

まず、多人数会話が二者間の対話と比べてどのように相互作用として異なるかについては、Kerbrat-Orecchioni(2004)に詳細な議論がある。それによれば、多人数会話では発話権のやりとりや参加のし方の様相がより複雑になるという。たとえば、ある参加者 A が別の参加者 B に質問を発しても、質問によって次の発話者として指定された B 以外の参加者 C が、代わりに答える、あるいは B の答えの途中で割り込んでくるなどして発話権を得る可能性がある。また、会話への参加のし方においても、多人数会話では、特定の参加者が傍観者的に退いてやりとりからはずれていることも可能になる。さらには、こうした様々な相互作用や参加のパターンが、やりとりの流れの中で次々と変化していくという。多人数会話の研究としては、英語のデータでは社会言語学的調査における面接(Schiffrin 1993)、フランス語に関しては、病院のシフト交替時の引継ぎ(Grosjean 2004)、研究者間のミーティング(Traverso 2004)、ラジオ番組の討論と離婚調停の話し合い(Bruxelles and Kerbrat-Orecchioni 2004)などの分析があり、話者の参加の枠組みや話者間の連携などについて考察が行われている。日本語については、Kawasaki(1992)が、三者間の相互作用に見られるあるパターンを「ブーメラン・スピーチ(Boomerang Speech)」として分析している。これは、参加者 A が本当の意図としては参加者 B に向けた発話を、もう一人の参加者である C に向けた形で発話し、それに対して本来の受け手である B が A に応答するという相互作用パターンである。藤本他の一連の研究(藤本他 2003, 2005)では、三者会話が討論と雑談という異なる談話カテゴリーの比較において分析されている。また、多人数会話におけるターン・テイキングや話者指定の仕組み、あるいは参与の枠組みなどの研究も行われている(榎本・伝 2003, 2004; 高梨他 2004, 2005)。

これら諸研究によって示されているのは、片方の話者からの発信がもう一方の話者に向けられ、応答あるいは反応の役割(義務)はその相手話者が必然的に負うという一対一の相互作用と異なり、三者以上のやりとりでは参加者間の相互作用がはるかに多様になるということである。また、参加者の役割関係や関わり方に関しても、二者間の対話からは得られない新たなダイナミクスが観察されている。本研究でも、こうしたことをふまえて、三者面接調査における話者間の相互作用の様々なパターン、および参加の枠組みや役割行動を検討し、それらと面接調査談話の展開との関わりについて考察する。

次に、面接調査という種類の談話の持つ枠組み、あるいはフレーム(Goffman 1974)の問題がある。フレームとは、当該の状況や相互作用について、人が持つ「ここで何が起きているか」という定義であり、それを通して発話や行動が解釈されるものでもあるとされる。Tannen(1993)は、フレームの概念に関連して、人が当該の状況やそこで起こる相互作用に対して持っている予測や期待というものがあり、それが相互作用における行動に影響を与えるとしている。

面接調査のフレームについて Schiffrin(1993)は、ある人物がもう一人から特定の情報を得ようとする非対称的な相互作用だと述べている。面接調査の方法論に関する文献においても、面接調査では雑談のようにすべての参加者が自由な役割でやりとりに参加するのではなく、話し手と聞き手の役割がほぼ固定されていることが指摘されている(鈴木 2005)。また、調査者がいかに質問を行い、適切に話題を操作する「舵取り役」になるかが重要視されている(フリック 2002; 保坂他 2000)。すなわち、調査者が質問をして、それに対して回答者が答えるという基本的な枠組みが予測あるいは期待されていると考えられる。同時に、質問という隣接ペア(Levinson 1983)の第一発話の話者である調査者が、話題操作および話者指定において主導権を持つと考えられる。ここでは、回答者間の相互作用の働きを考察する上で、面接調査にはこうした参加者間の役割関係、および談話としての性格があることを基本的な前提とする。

3. データの概要

本研究で用いたデータは、社会言語学的調査における半構造化面接を録音し、文字化したものである。面接調査は、調査者(女性)1名に対して大学4年生の回答者2名という三者間で行われた。調査者と回答者は初対面、回答者は同性の親しい友人同士である。分析対象とした面接は3件で、回答者の男女別内訳は、男性ペアが1件、女性ペアが2件であった。各面接とも所要時間は約15分で、「携帯電話の日常生活での使い方や、自分にとっての位置づけ」をテーマに回答者の日頃の行動や意識について話してもらうものであり、インフォーマルな会話形式で行われた。分析では、質問の開始から収束までの発話すべてを対象とした。

4. 分析

2節で見たように、調査者の質問に回答者が答えるという面接調査の枠組みにおいては、調査者と回答者の間でのやりとりが基本的な図式であって、回答者同士の相互作用は原則として想定されていないと考えられる。しかし、二人の回答者が同席する今回のデータでは、回答者間に各種の相互作用が観察された。

本研究では、「回答者間の相互作用」を広い意味でとらえることにする。すなわち、回答者同士でかわされた発話(あるいは笑いなど)に限定せず、仮に発話の向けられた先は調査者であっても、それがもう一人の回答者の発話行動を下敷きにしたものである場合など、複数の回答者がその場にいることによって可能になっている相互作用という意味で、「回答者間の相互作用」を考える。

以下では、まず4.1節でデータに見られた回答者間の相互作用の種類について述べる。4.2節では、それらが面接調査の回答行動としてどのように位置づけられ、どのような回答として現れていたかを示す。続く4.3節では、それらが回答者の談話行動としてどのようなサブタイプを実現していたかを述べる。

4.1. 回答者間の相互作用の種類

今回のデータに見られた回答者間の相互作用は、以下の6種類のいずれかに分類された。なお、これら6種類はそのいずれもが、頻度の違いはあっても今回分析した3件の面接データのすべてにおいて観察された。

- ① もう一人に同意要求・情報確認をする
- ② もう一人からの同意要求・情報確認に応答する
- ③ もう一人の回答にコメントをはさむ
- ④ もう一人からのコメントに対して応答／反応する（笑いなど）
- ⑤ もう一人の回答をふまえて回答する
- ⑥ もう一人の回答に相づちをうつ／反応する（笑いなど）

それぞれの種類の相互作用を、データからの具体例で示す²。

例1は、調査者Iと回答者E・Fのやりとりの一部で、①の同意要求・情報確認と②の同意要求・情報確認への応答の例である（当該の発話部分を矢印と太字で示す）。ここでは、充電が切れた場合などに友人の携帯電話（以下、携帯）を借りることについての心理的負担をEとFが述べている。Eの277E・279Eの発話に重ねるようにFが280Fで自発的な同意表明を行った後、Eが282Eで同意要求を行い、Fが283Fで肯定的に応じている。

- 例1. 274 I じゃあ、そういう面でも、経済面でも、ちょっと、
275 E そう、
276 I 気//を遣うような、
277 E **もう人の携帯使ってる**と、
278 I うん
279 E **もう心、休//まらない**よね。
280 F **そう、休まら//ない。**
281 I **あー、なるほど**ね。
→ 282 E **まいてまいてって感じだもん**ね。[笑い]
→ 283 F [笑いながら] **そう**そう、まいてまいてまいてって、ほんとに。

例2は、③のもう一人の回答へのコメント、および④のコメントへの応答／反応の例である。なお、本稿で言うコメントとは、「評言」の意味に限定されるものではなく、感想や共感的発話、からかい、つつこみなど、相づちより実質的な合いの手も含めた意味で使っている。また、反応とは、主に笑いを指す³。Fが調査者に対して、自分の携帯の通話機能がこわれたときの話を始めると、Eが167Eで「あったねー。」というコメントを横からはさむ。それに対してFが168Fで「あったねー。」という繰り返しと笑いに応じている。この例では、応答と笑いの両方があられ

ているが、いずれか一方のみの場合もあった。

- 例 2. 162 F あたし 1 回、通話機能がー、こわれてしまっー、
163 I うーん。
164 F メールしかできなくなっちゃったん//ですよ。
165 I あ、そういうこともあるの。
166 F はい。{笑い}
→ 167 E あったねー。{笑い}
→ 168 F あったねー。{笑い} そうそのときに…〈後略〉

例 3 は、⑤のもう一人の回答をふまえた回答の例である。「電話やメールのほかに、携帯をどんな用途で使うか?」という調査者の質問に対して、二人の回答者が互いの言ったことをきっかけとして発話を重ね合い、情報を追加し合うことで、共話(水谷 1993)のような形をとりながら回答を共同構築している。(例 3 では、直前の相手の発話に上乗せしている発話を特に「⇒」で示す。)

- 例 3. → 367 B そうだ、そ、スケジュールも使いますね、やっぱ。データに、
368 I あー、そうです//か。
→ 369 B 書き込、うん、書けるんすよ。
370 I ふんふん。
→ 371 B そういうのも、使えるし。
⇒ 372 A だからメモ帳とか持たないです//ね、ほんとに。
→ 373 B うん
374 I ふーん。
→ 375 A もう携帯電話 1 個あれば、それで事足りるんで。
376 I ふーん。
⇒ 377 B 目覚まし時計もこれでできるし。
378 I あー、そうですよね。タイマー、で。

例 4 は、⑥のもう一人の回答への相づちの例である。「携帯を家に忘れた場合、取りに戻るか?」という質問に対して、F が 94F・96F で回答している。それに対して、E が調査者と同時に相づち(98E)をうつことで、F の発話を脇から受けるという相互作用が見られる。

- 例 4. 94 F 離れてる時間が、短ければ、
95 I うん、
96 F 大丈夫なんですけどね。

- 97 I あー、//なるほどね。そっかー。
→ 98 E ふーん。

4.2. 回答行動としての回答者間相互作用

4.2.1. 回答行動としての位置づけ

面接調査の談話において、回答者にとっての第一の役割は「調査質問に答える」ことであり、したがって、調査者に向けて回答を行うというパターンが基本になる。その限りにおいては、調査者と回答者の間でなく、回答者同士の間で行われる相互作用はいわば変則的であり、極端な場合には逸脱的な行動ともなり得る。しかし、調査者からの質問を受けて調査者に直接向ける形でなされた応答でないものは、回答行動にはなり得ないのであろうか。

実際のところ、データに見られた相互作用の例は、基本的になんらかの形で調査の回答行動として位置づけられ得るものと考えられた。本節では、それらの相互作用がどのような点から回答行動と見なされ得るか、調査者も含めた談話参加者のどのような行動が、回答者間の相互作用を回答行動として位置づけているかを見ていく。

当該の相互作用がどの程度明示的あるいは直接的に回答行動と見なせるかは、まず、そこに含まれる発話がだれに向けられたものであるか、どのような内容を持った発話かということと関係している。上述の例3のような場合は、互いの発話に続けたり上乘せしたりしている相互作用であっても、同時に、調査者の質問を受けて調査者向けに発せられた回答となっている。また、例1では、277E・279E, 280F, 282E, 283Fはいずれも回答者間で互いに向けた発話ではあるが、内容的に直前の調査者の発話(274I, 276I)と合致しており、いわば調査者を脇の聞き手とした「聞かせ」の回答と見ることができる。

回答行動と見なし得るかどうかについては、談話参加者たちがそれをどのように位置づけているかということも重要である。その一つとして、回答者の側で、互いの間でのやりとりを最終的に調査者に対する発話として収束させるという行動が見られた。以下の例5では、カメラ付きの携帯がほしいと思っているBが、そこまでの回答内容から察してカメラとしての携帯には興味を持っていないと思われるもう一人の回答者Aに確認の発話を行い(239B)、それがきっかけとなって、しばし調査質問に基づかないやりとりがなされる。しかし、245AでのAによる発話は、丁寧体へのシフトを伴うことから分かるように、調査者に向けた回答として発せられている。

- 例5. 239 B そしたら、やっぱカメ、つ、使わない？
240 A いや、どうだろう。どういうときに使うの？
241 B {笑い}
242 A あ、あ、//カシャン
243 I {笑い} 有名人に会ったときとか {笑い}
244 B あ、そう、どっか行くと、旅行行ったときとか。
→ 245 A あ、あれば便利だと思いますけどね。別になくても困らないかな、っていう。

例5で興味深いのは、調査者からでなく、もう一人の回答者から投げかけられた同意要求的な確認(239B)に対する答えを、Aが最終的に調査者への回答(245A)として述べていることである。これによって、一見脱線したような239B～244Bのやりとりが、調査への情報提供として収束され、位置づけられている。また同時に、245Aに見られる発話行動は、回答者Aが面接調査における行動の枠組み(回答者は調査質問に答える)を意識しており、それに合った行動をとろうとしていることのあらわれとも考えられる。

加えて、いわば調査談話のオーガナイザーであり、回答の受け手である調査者が、その相互作用に対してどのような応答や反応をしているか、すなわちその相互作用をどのように受け止めているかも、回答行動としての位置づけの上では重要な要素と考えられる。以下に例を示す。

- 例6. 37 I ジャ、電話かけるっていうのは
38 D {笑いながら} 電話、
39 I あまり使わない？
40 C 彼？
41 D {笑い}
→ 42 I あっ、なるほどね。

例6では、携帯で(メールでなく)電話をよくする相手はいるかという質問にDが言葉をにごしているところで、Cが「彼？」と暴露的な代理の情報提供として働くコメントをはさみ、Dが笑いで応じている。これは、調査者がDに発した質問(39I)に応じてCがDに発話していることから考えても変則的なやりとりであるが、それに対して調査者が42Iで「あっ、なるほどね。」と受けて、Kawasaki(1992)のブーメラン・スピーチに類するパターンが成立している。この42Iは、調査者が40Cを「聞かせ」の情報提供、41Dの笑いをそれへの肯定的応答と解釈し、先行するやりとりを情報として受け入れた、すなわち、回答(に準ずるもの)として認定したことを示すものと言える。例1の281I「あー、なるほどね。」も、同様のことを示す受けである。

このように、データに見られた回答者間の相互作用は、多くの場合、面接調査における回答行動として認めることができた。中には、例2や例4などの、もう一人の回答に対してはさまれたコメントや相づちのように、典型的な回答行動としては明示的には位置づけにくいものもあるが、それらもまた、間接的に情報提供の機能を担うなどの役割を果たす場合がある。それらについては4.2.2節で述べる。

4.2.2. 回答行動のサブタイプ

4.2.1節では、面接調査の回答者間で行われる相互作用が、変則的・逸脱的な行動でなく、回答行動として位置づけられることを述べた。ここでは、調査者の質問に個々の回答者がそれぞれ自分の答えを述べるという回答行動パターンのほかに、回答者間の相互作用が起こることによって、どのようなサブタイプが見られたかを述べる。

(1) 一人の回答者の発話がきっかけとなってもう一人の回答が引き出される

一人の回答者がもう一人の回答者にコメントや同意要求などの発話を行うことによって、後者が調査質問に対して自発的に出そうとしない情報が引き出される場合が見られた。上述の例6を以下に再掲する。ここでは、調査者の37Iでの質問に対してDがすぐに答えないために、再度39Iの問いかけがなされている。そこでCが40Cでコメントをはさんだことに対して、41Dの笑いが引き出され、それを調査者が肯定の応答と受け取って42Iで受けている。ここでは、CのDに対する発話をきっかけに、Dへの質問の答えが導き出されたと言える。

例6. (再掲)

- 37 I じゃ、電話かけるっていうのは
38 D {笑いながら} 電話、
39 I あまり使わない？
→ 40 C 彼？
→ 41 D {笑い}
42 I あっ、なるほどね。

例7は、例6と同じ調査談話の少し後の部分である。調査者がCに対して先の40Cを下敷きにした質問(78I)をし、Cが自分の回答(81C)をしたのに対して、Dがコメント(83D)を述べている。例6の41Dは、携帯を電話の用途に使う相手は彼であろうという40Cの示唆に笑いで間接的に答えたものであったが、例7の83Dは彼とはメールも電話も使うということを述べて、41Dよりさらに多くの情報を明示的に出している。この83Dは、40Cがそもそものきっかけとなり、81Cが再度のきっかけとなる形で、すなわちもう一人の回答者の発話に誘発されて、出てきた発話である。それに対して調査者が84Iで、それを回答情報として受け取る相づちを行っている。

- 例7. 73 C うちのお母さんと連絡とるときは、ぜったい家の電話にかけないと、
74 I あー、なるほどね、
75 C とれないので、
76 I うん、
77 C しますね。
78 I ふーん、なるほど。彼は、とか言って。{笑い}
79 C //{笑い}
80 D {笑い}
→ 81 C まあ、彼はメールも電話もっていう {笑い}
82 I ああ。
→ 83 D {笑い} メールも電話もは、たしかに。
84 I ふーん、なるほどね。

次の例8では、まわりの友人たちが携帯をどのぐらいの頻度で新しく買い替えているかという質問に対して、Aが自分の回答を述べつつ、Bの見解も確かめている。

- 例8. 257 I やっぱり結構、買い替えー、ます？ ほかの人もかも、見てると。
258 A あー、まわ//りの、
259 I 機能が、どんどん付いてくると、
→ 260 A つ、そうですね、//いちね、一年ぐらい？
261 I もっと新しい、
→ 262 B そうだね。

260Aのような発話は、情報確認によって、より確実な、あるいは一般性の高い情報提供をしようという意図から出たものと言えるかもしれない。しかし同時に、こうした情報確認、あるいは例1で見たような同意要求は、もう一人からも情報を引き出すことに役立っている。すなわち、一人が回答しながら「～だよね」「～じゃない？」などと言ってもう一人の意見も確かめることで、調査者が「〇〇さんはどう思いますか？」とわざわざ尋ねなくても、両者の回答が自動的に得られることになる。

(2) もう一人の回答に対する相づちや反応が間接的な回答になり得る

もう一人の回答者が行った回答に対する相づちや笑いの働きについて考える。例9は、携帯が手元になくて友達に連絡しようとするときには、(連絡したい相手の携帯の番号を知っている)共通の友達を探して、その人の携帯からかけてもらう、という話をEがしているところであるが、それに対してFが128Fで相づちをうっている。この「そうそうそうそう、うん」という相づちは、FがEと同じ考えであることをはっきり示している。

- 例9. 123 I うん、そうすると、
124 E はい
125 I あ、番号が？
126 E 番//号が、多分、うん、その//子も同じ番号を知ってるから
127 I じゃなくて？
→ 128 F あ、そうそうそうそう、うん

相づちが間接的な意見表明として機能し得ることは、以下の例10からも分かる。

- 例10. 156 I あ、そうか、時計がわりにも使うー
157 D はい。
158 I から、しょっちゅう見るっていう、

- 159D はい。
 → 160C あー、そっかー。{笑い}
 161D {笑い}
 162I Cさんは時計には使わない？ {笑い}

例10では、その直前に回答者Dが答えたことを調査者が繰り返して確認し(156I, 158I), Dが159Dで肯定の応答をしている。それに対する160Cの相づち「あー、そっかー。」および笑いから、携帯を時計がわりに使うということがCにとっては意外だったことが示唆され、その結果、調査者が162Iのような質問をCに向けていると考えられる⁴。

これらの例に見られるように、もう一人の回答者の回答に対する相づちや笑いは、場合によっては様々なニュアンスを含んだ直接的・間接的意見表明となり、ひいては間接的な回答行動としても機能する。それを通して、調査者はもう一人の回答者の意向を察知し、その回答者に新たに発言を求めたり、その後の質問の出し方の参考にしたりすることができる。

(3) 共同構築的な発話によって双方から回答が積み上げられていく

二人の回答者がいる場合、両者が互いに発話を重ね合いながら、共同構築的に回答を行っていくというパターンも起こり得る。こうした発話連鎖は、通常「活発なやりとり」と呼ばれるものの一例である。

前述の例3と同様、以下の例でも、互いに相手の言ったことに上乘せしていく形で次々に発話がなされている。こうした発話パターンにおいては、一人の回答者が延々と答える場合と異なり、掛け合いのように短い回答が連なり、回答者双方からの談話への寄与が積極的になされる。(直前の相手の発話に上乘せしている発話は「⇒」で示す。)

- 例11. → 121C 連絡とる方法が携帯で普通になっちゃってるから、
 122I うん、
 → 123C //もう
 ⇒ 124D 持ってるのがむこうにとっては絶対当たり//前だと思ってるから、
 → 125C 当たり前
 → 126D すごい持ってないってことで、すごいトラブルが、{笑い}
 ⇒ 127C 起こるよね。

次の例12でも、互いに同意の発話をしたり相手の発話を引き取ったりし合うことで、回答がつけられている。発話が向けられる先も調査者であったり、もう一人の回答者であったりと、自由に動いている様子が見受けられる。

- 例12. → 181E なんか、人のメールとかこうやって打ってても、たまに見えちゃっても、見

- てないわよっていうアピールをしちゃう {笑い}
- 182 F そう {笑い}, わかるわかる。
- 183 I {笑い}
- 184 E {笑い}
- 185 F たまに見えちゃうけ//どね,
- ⇒ 186 E 見えてるんだけど, //見てないわよっていう,
- 187 F うん
- 188 E なんか, //入っちゃいけない空間がそこにはある//んで,
- 189 F うん うん
- 190 I あー, やっぱりじゃあその, 携帯持ってる人が, その携帯を使ってるときっていうのは,
- 191 E あー,
- 192 I すごくもう, プライベート。
- 193 E //プライベート。
- 194 F うん, プライベートです。
- 195 I ふーん。
- 196 E 話しかけないもんね。
- ⇒ 197 F そうそう, 日記を覗き見するような//か//んじだよね, うーん。
- 198 I あー,
- ⇒ 199 E かんじだよね。

(4) 合いの手を含む「おしゃべり」的なやりとりの中で回答がなされる

以下の例13では、一人の回答者が携帯を家に忘れたときのエピソードを披露している際に、もう一人が盛んに反応やコメントをはさんでいる。相づちやコメントを調査者が盛んに行うことによって調査談話を盛り上げることもあるが、友人であるもう一人の回答者が脇から合いの手を入れることで、一連の回答発話が、よりリラックスしたおしゃべりのような雰囲気の中でなされている。

- 例13. 287 C ああ, どうしよう, 携帯がないと思って, 家に電話して, 公衆電話から,
- 288 D {笑い}
- 289 C 「ちょっと, お母さん, 携帯もってさ」とか {笑い}
- 290 D {笑い}
- 291 C 使い方わからないから, 「まずそこの矢印の上を押してー」とか言って,
- 292 D {笑い} 番号聞くんだ,
- 293 C {笑い} 「なにににちゃんの番号を言って」って言って, そこで控えて,
〈中略〉

- 303 C うちのお母さん、ほんとにけ、携帯とかは、全然分からないの//で、
 → 304 D あ、でもうち
 もそうだよ、お母//さん。
 305 C なんか私が押してって言ったところしか押せないんですよ、
 本当に。
 → 306 D そこまでか？ [笑い]

例12に見られるような発話の重なりや、共話的に相手の発話を引き取るような形、そして例13のように相手の発話に積極的に関わっていくような聞き手の相づちやコメントを、Tannen (1984)では会話における共感・参与の度合いの高い (high-involvement) 発話パターンとしている。内容的にも互いに共感できる話題について、友人同士が活発な発話交換を行うことで、やりとりも活気を帯びると考えられる。

4. 3. 回答者間相互作用に見られる談話行動のサブタイプ

回答者間の相互作用の中には、質問への回答以外の行動も観察された。談話参加者として、「回答を述べること」以外の出方がなされることには、(調査者との一対一の場面でなく)もう一人の回答者も同じ場で回答を行っているという状況、調査者でなくもう一人の回答者に対して発話するということが大きく関わっていると考えられる。

今回のデータに見られた例として、以下では、話題の操作、調査質問へのコメント、聞き手としての受け、もう一人の回答についての解説という4種類の行動について述べる。

(1) 話題の操作

面接調査においては、話題の導入や転換は基本的に調査者が行う。しかし、例14では、人との待ち合わせにおける携帯の使用についてAと調査者が話しているところで、BがAへの問いかけという形を通じて話題を導入している。

- 例14. 282 I 不安で待ち合わせ場所で待ってるってことはもう、
 283 A 間違えたかなあ//とか、
 284 I あり得ない。
 285 A ないですからねー、もう。
 286 I うーん。そうですよねー。
 → 287 B 逆に今、携帯が、あるとー、家電 (いえでん)、かけづ、づ、づ、づらくない？
 288 A ああ、個人にかけるから//ね。
 289 B な。
 290 I ああ。

話題の転換がどの話者でも自由に行える雑談などと異なり、面接調査では原則として調査者がその権限を持つということ意識して遠慮したのか、287BでのBの発話は言葉を区切りながら、ややつかえ気味になされている。しかし、この発話によって、話題は「家の電話にかけることへの抵抗感」へと向いていくことになる。287Bではまた、調査者に直接言わずに、もう一人の回答者に向けた発話の形をとることで、話題を操作するという行動の能動性もやわらげられているのではないと思われる。

(2) 調査質問へのコメント

話題の導入や転換と同様に、調査質問に対してその前提に疑問を呈することも、回答者にとっては勇気のいる行動であろう。例15では、「携帯電話を落とした場合、(拾った人に見られるので)とても心配か」という質問に対して、Dが「果たして拾った人が見るだろうか」という疑問を述べ、Cもそれに同調している。回答者としての振る舞いからはずれる可能性のある行動では、調査者に直接向けるのではなく、互いに向けた発話の形をとり、「聞かせ」のやりとりとして調査者に発信することが一種のクッションになっていると考えられる。

例15. 334 I 落っこしたりとかしたら、すごく心配になってしまう？

〈中略〉

→ 343D メール、見られるものなのかなあ、落としたら。

→ 344C どうなんだろ。でも、見られても、その人は知らない人だから別にいいっちゃいいのかも。

上述のブーメラン・スピーチについてネウストブニー(1983)は、敬語の使用を回避する戦略になること指摘している。敬語使用が規範として求められるような相手に対する発話を敬語なしで行うための戦略となり得る行動は、ほかの面でも規範的なルールの遵守を回避する戦略として機能し得ると思われる。その意味で、例14や例15に見られるような、もう一人の回答者に向けた形をとる発話は、面接調査において回答者に期待される行動範囲の限定を回避する戦略として機能していると考えられる。

(3) 聞き手としての受け

「(調査者と並ぶもう一人の)聞き手」としての発話ということでは、例2、例4、例10に見られる相づちやコメントは、もう一人が述べた回答に対して、聞き手の立場から発せられていると見ることができる。相づちや笑いを発している回答者は、その時点では「回答の発話を受けている側」という意味ではむしろ調査者と同じ側にいる。すなわち、「調査者 vs. 回答者」から「話し手となっている談話参加者 vs. 聞き手にまわっている談話参加者」へと、役割の図式の一時的な組み替えが起こり、それに伴って参加者間の連携のし方も一時的に変化していると考えられる。

以下の例16では、Dが携帯が使えなくなったときのために日頃連絡をよくとる友人の携帯の番号を控えていると述べ、それに対してCがその準備の良さに感心している。ここでは、驚いていることもあり、Cは同席しているもう一人の回答者としてというよりは、まったくの聞き手役としてDの回答を受けていることが観察される。

- 例16. 195 D で、あの一応、よく、あの連絡とる人の、//携帯番号は、手帳にメモしてあって、
- 196 I うん、
- 197 C {笑い}
- 198 D 充電が切れて、どうしても連絡とりたいときは公衆電話からかけるように、
- 199 I ああ//あ、
- 200 D ちゃんと、備えてるんですよ。{笑い}
- 201 C すごー//い。{笑い}
- 202 D はい。{笑い}
- 203 I 控えておかないと、
- 204 D はい、
- 205 I 携帯、使わない//ときは、番号、わかんないですもん//ね。
- 206 D はい、 はい、
- 207 C あ、す//ごーい。
- 208 D だから忘れ//ないんですけど、充電ほんと切れちゃうんですよ、しょっちゅう。いつも使っているんで。{笑い}
- 209 I {笑い}
- 210 C すごい。

(4) もう一人の回答についての解説

もう一つ観察されたのは、もう一人の回答者が述べた回答に対する「解説者」としての行動である。これは、親しい友人として共有している知識や経験によって可能になるものである。以下の例17のAの発話は、その典型的なものと言える。

- 例17. 35 I Bさんは、//結構、
- 36 B おれは、結構まあふうにひまなときなんかは、メールとかしたり、しますね。
- 37 A 彼はすごいですよ、もう。
- 38 B {笑い}
- 39 I あ、ほんとに。{笑い}
- 40 A もう女の子にこう、こまめに、わ、若者ですから。

例17の37Aや40Aは、情報をほのめかしながら、もう一人の回答者に自分でそのことについて言うよう暗に促しているとも思われる点では、例6の40C（「彼？」）と共通している。しかし、40CがDに向けた発話であるのに対して、37Aと40Aは調査者に向けられており、Bの行った回答に注釈を加える形になっている。ここでのAは、回答者の一人でも脇の聞き手でもない、解説者というまた別の立場から発話していると考えられる。

5. 考察

三者面接調査では、二人の回答者の間に様々な種類の相互作用が見られた。それらは、回答行動として認め得るものであると同時に、回答者の行動の面でも「調査質問に答える」以外の談話行動として現れていた。

面接調査の基本的な枠組みは、調査者の質問に回答者が答えるという調査者—回答者間のやりとりのパターンだと考えられる。しかし、二人の回答者の間で相互作用がなされたからといって、それは調査の運営を混乱させるものではなく、調査者・回答者の双方から回答行動として位置づけられ、回答行動のサブタイプとして機能していた。これらのサブタイプは主に、一人の回答者の働きかけや回答発話に反応する形でもう一人の回答者の回答も導き出されるというパターンをとっていた。また、もう一人からの聞き手としての反応が、発話しやすい雰囲気や場をつくるということも観察された。

回答者の談話参加者としての行動についても、回答者間の相互作用において各種のサブタイプが観察された。話題を操作したり、調査質問自体へのコメントを行ったりといった、調査者と一対一の場面では通常行いにくい行動が、もう一人の回答者への発話という形をとることで、なされやすくなっていたと考えられる。

また、もう一人の述べた回答に対して聞き手にまわったり、解説者的な立場をとったりする行動に関しては、面接調査談話に参加している三者の役割や連携の図式の組み替えが関わってくる。4.3.節の(3)でも述べたように、一方の回答者が聞き手にまわる場合は、「〈調査者〉と〈回答者二人〉」という基本的な枠組みが、「〈話し手（答えている回答者）〉と〈聞き手（調査者ともう一人の回答者）〉」という異なる連携体制に一時的に移行すると考えられる。また、友人としての知識を生かしてもう一人の回答に対する解説を行う場合には、同じ回答者であるという立場よりもむしろやや第三者的なスタンスから発話しているのではないかと思われる。

Holstein and Gubrium (1995)では、アクティブ・インタビューの重要な要件として、単なるやりとりでなく調査者と回答者が相互作用を通して意味を協働的に作り上げていくこと、そして回答者が自らの持つ様々なアイデンティティを通して多声的に発話することをあげている。すなわち、同じ一人の話者であっても、様々なアイデンティティ（たとえば、女性として、娘として、妻として、母として）を通して語ることによって、あるトピックが多様な観点や側面から眺められ、語られるのである。このように、調査者と回答者の一対一の相互作用においても、回答者は

多声的に発話し得る。しかし、今回の例で見てきたように、もう一人の回答者、およびその回答者との相互作用というリソースを得ることによって、回答者は様々なスタンスや連携をとりながら、多様な働きかけをもう一人の回答者に向けて、あるいは調査者に向けて行うことが可能になる。そして、ひいてはそれが面接調査談話において出現する情報の豊かさにもつながると考えられる。

本稿では、回答者間の相互作用に着目し、それらが面接調査において回答として機能すると同時に、参加者同士の各種のコミュニケーション行動や役割行動を可能にするものであることを見てきた。そしてそのことは、面接調査という特定の枠組みを有する談話行動の中で考察することによって、より明確にとらえることができたと言える。

三人以上の参加者のいる談話における参加者間相互作用の働きは、枠組みや役割関係など、当該談話の持つ特徴や前提に照らして分析することで、より明示的にとらえ得る。その意味では、そうした相互作用の働きや効果のあり方は、制度的な参加役割など一定の枠組みによって特徴づけられる種類の談話、たとえば教室談話やグループ・セラピーの談話などに関して、非常に興味深い分析テーマになるのではないだろうか。

6. 今後の課題

本稿では、親しい友人同士を回答者とした三者面接調査における回答者間の相互作用を検討したが、今後の課題としては、今回の知見をふまえて、調査者を含めた三者間の相互作用にも考察範囲を広げるといえることがある。また、回答者同士が初対面の場合の面接調査の分析もある。初対面の回答者2名は相互作用を行おうとするか、その場合、相互作用を円滑にするための人間関係の構築は調査の進行においてどのように行われるかといったことは、非常に興味深い。そして、そこにあらわれてくる相互作用の特徴や、友人同士の回答者の場合との異同なども、検討すべき課題であると考えられる。

注

- 1 本研究で分析対象とする面接調査は、回答者からの情報・データ収集を目的として行われるものであり、その意味で、人物・能力審査を目的とする就職試験などの面接とは異なる。
- 2 データの文字化の凡例を以下に示す。

発話の話者記号	I	：調査者
	A～F	：回答者
//		その後の部分が次の発話と重なる
{ }		笑いなどの非言語行動
?		上昇音調
- 3 本稿では録音とその文字化をデータとして用いたため、相づちや反応に関しては音声的に認め得るもののみを分析対象とし、うなずきや顔の表情、身振りなどは含めていない。
- 4 例10では、Cが相づちをきっかけに、162Iの問いを受けて発話の機会を得ている。このことに関連して、伝(2003)は、多人数会話において、なされた発話に対してある参加者が相づちや同

意などを積極的に行うことによって、次話者になる優先権を得ようとする場合があることを指摘している。三者面接調査でも、回答者がもう一人の述べた回答に対して脇から相づちをうつことで、質問—回答のやりとりへ参入し、それに続いて自身の回答発話を行う、あるいは例10のように調査者に水を向けてもらうきっかけを作る場合もあると考えられる。

参考文献

- 榎本美香・伝康晴(2003)「3人会話における参与役割の交替に関わる非言語行動の分析」『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-A301, 25-30, 人工知能学会
- 榎本美香・伝康晴(2004)「3人会話における聞き手のちょっとした振る舞いについて」『社会言語科学会第14回大会発表論文集』162-165, 社会言語科学会
- 熊谷智子・木谷直之(2005)「三者面接調査における雑談的行動—回答者同士の相互作用に着目して—」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』62-65, 社会言語科学会
- 鈴木淳子(2005)『調査的面接の技法 第2版』ナカニシヤ出版
- 高梨克也・伝康晴・榎本美香・森本郁代・坊農真弓・細馬宏通・串田秀也(2004)「多人数会話における話者交替再考—参与構造とノンバーバル情報を中心に—」『社会言語科学会第13回大会発表論文集』144-153, 社会言語科学会
- 高梨克也・藤本英輝・河野恭之・竹内和広・井佐原均(2005)「会話連鎖を利用した態度情報と参与者間関係の特定方法」『言語処理学会第11回年次大会発表論文集』1237-1240, 言語処理学会
- 伝康晴(2003)「受け手になること、次話者になること—話者交代規則再考—」『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-A203, 107-112, 人工知能学会
- ネウストブニー, J.V.(1983)「敬語回避のストラテジーについて—主として外国人場面の場合—」『日本語学』2(1), 62-67, 明治書院
- 藤本学・村山綾・大坊郁夫(2003)「三者会話におけるトピックの変遷と会話の展開について」『社会言語科学会第12回大会発表論文集』33-36, 社会言語科学会
- 藤本学・村山綾・大坊郁夫(2005)「3人集団による会話コミュニケーションに関する研究：個人特性が会話展開に関する発話行動に及ぼす影響」『社会言語科学会第15回大会発表論文集』20-23, 社会言語科学会
- フリック, ウヴェ著, 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳(2002)『質的研究入門—人間の科学—のための方法論—』春秋社
- 保坂亨・中沢潤・大野木裕明(2000)『心理学マニュアル 面接法』北大路書房
- 水谷信子(1993)「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12(4), 4-10, 明治書院
- Bruxelles, S. and C. Kerbrat-Orecchioni (2004) Coalitions in polylogues, *Journal of Pragmatics* 36, 75-113.
- Goffman, E. (1974) *Frame analysis: An essay on the organization of experience*, Boston: Northeastern University Press.
- Grosjean, M. (2004) From multi-participant talk to genuine polylogue: Shift-change briefing sessions at the hospital, *Journal of Pragmatics* 36, 25-52.
- Holstein, J.A. and J.F. Gubrium (1995) *The active interview*, Thousand Oaks, Cal.: Sage Publications.
- Kawasaki, A. (1992) Boomerang speech in Japanese. 武内道子他(編), 『ことばのモザイク: 奥

- 田夏子名誉教授古稀記念論文集』173-186, 目白言語学会.
- Kerbrat-Orecchioni, C. (2004) Introducing polylogue, *Journal of Pragmatics* 36, 1-24.
- Levinson, S.C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. (1993) "Speaking for another" in sociolinguistic interviews: Alignments, identities, and frames, In Tannen, D. (ed.) *Framing in discourse*, 231-263, NY: Oxford University Press.
- Tannen, D. (1984) *Conversational style: Analyzing talk among friends*, Norwood, NJ.: Ablex Publishing Corporation.
- Tannen, D. (1993) What's in a frame?: Surface evidence for underlying expectations, In Tannen, D. (ed.) *Framing in discourse*, 14-56, NY: Oxford University Press.
- Traverso, V. (2004). Interlocutive 'crowding' and 'splitting' in polylogues: The case of a researchers' meeting, *Journal of Pragmatics* 36, 53-74.

付 記

本研究は、平成13～16年度科学研究費補助金（基盤(B)(2)）「日韓新時代における若者の国際コミュニケーションのあり方と意識に関する研究」（研究代表者：尾崎喜光）の成果の一部であり、社会言語学会第16回大会における口頭発表（熊谷・木谷 2005）をもとに加筆・修正したものである。

（投稿受理日：2005年11月30日）

（最終原稿受理日：2006年6月14日）

熊谷 智子（くまがい ともこ）

国立国語研究所

190-8561 東京都立川市緑町3591-2

tkuma@kokken.go.jp

木谷 直之（きたに なおゆき）

国際交流基金日本語国際センター

330-0074 埼玉県さいたま市浦和区北浦和5-6-36

Naoyuki_Kitani@jpf.go.jp

Interaction between respondents in three-party survey interviews: Interviews with pairs of same-sex friends

KUMAGAI Tomoko

The National Institute for Japanese Language

KITANI Naoyuki

The Japan Foundation

Japanese-Language Institute, Urawa

Keywords

three-party discourse, survey interview, interaction between respondents, participant roles

Abstract

In this paper, we analyze the interaction between the respondents in three survey interviews of two respondents each, as instances of three-party discourse. Given the basic question-answer structure of the survey interview, interaction between the respondents has the potential of becoming disruptive behavior. However, we found that on the contrary it functioned as answering behavior. We observed the following types of utterance functions: 1) opinion confirmation (agreement requests)/information confirmation requests and responses to these confirmation requests, 2) comments on the other respondent's answers, and answers/responses to these comments, 3) answers based on the other respondent's utterances, and 4) back channel and responses to the other respondent's answers. We also demonstrate that these interactions gave rise to subtypes of answering behavior other than "each respondent answering questions separately," as well as subtypes of respondents' communicational behavior other than answering.